

## 鬼退治秘聞（市島町）

山道をかけ下りてきた兵士が、麻呂子親王（まろこしんのう）に、大声でほうこくしました。

「土の中から、馬のいなく声がきこえます。」「ほってみよ。」麻呂子親王が、鬼を退治（たいじ）するため、丹波の大江山（おおえやま）へむかうとちゅうのできごとです。

兵士たちがほってみますと、一頭のりっぱな馬が、土の中から出てきました。親王は、兵士たちをはげました。

「これは、日ごろ信仰（しんこう）する七仏薬師（しちぶつやくし）が、われにたまわった馬にちがいないぞ。みな、薬師如来（やくしによらい）の加護（かご）を信じて、大江の山へおし進めや！」

その馬にまたがり、千束（せんそく）、萩原（はぎわら）、六人部（むとべ）を通して、下竹田村（市島町）に着いた親王は、七仏薬師の像をほって、かぶとの真向（まっこう）に立て、兵士を勢ぞろいさせました。兵士の数は、一万名であったと伝えられ、いまも市島町の寺内（じない）に、一万坂（いちまんざか）という地名がのこっています。



大江山の鬼は、三鬼でした。

親王の軍勢は、そのうちの一鬼をたおし、一鬼をつかまえて与謝海（よさのうみ）（宮津湾）へ沈めました。のこりの一鬼は、こうさんしましたので、親王は、竹野郡宮村（たけのぐんみやむら）での斎大明神（いつきだいまようじん）のやしろつくり、土はこびをさせました。鬼は、よく働きましたから命を助けられ、斎社（いつきのみや）に封じこめられることになりました。が、それを聞くと、鬼は、かなしそうに言いました。

「おみやに封じこめられてしまうんでは、いっぺんも、世間が見られませんかいな。せめて、年にいちどだけでも、世間のようすを見せていただくわけにはいきませんじゃるか。」「ほんにのう。」と、兵士たちは、同情（どうじょう）しました。

親王は、この鬼にぜったいに悪いことはしないと誓わせて（ちかわせて）、斎大明神のお祭りの日だけ、外に出ることを許してやりました。

こうして、ぶじに鬼退治がおわりましたので、親王は、七仏薬師を彫刻（ちようこく）したゆかりの地の下竹田村に、寺を建て、薬師如来（やくしによらい）の像を安置（あんち）しました。

寺は、いま、鎌倉山清園寺（かまくらさんせいおんじ）とよばれています。この清園寺に残っている石燈籠（いしどうろう）石燈籠のひとつは、いまからおよそ六百年前の、貞和（じょうわ）三年に作られたものですが、兵庫県に残っている石燈籠のなかでは、いちばん古くて、貴重な文化財（ぶんかざい）です。

